



タイムマシンにおねがい

[目次へもどる](#)

第2回 夢と映画

「治療技法論」(2012～) → 「心的構造論」(2003～2011) → 『人形の身体論—その精神分析的考察』(2001～2002) → 「新世紀人形展」(1999)

『人形の身体論—その精神分析的考察』第2回は、2001年7月26日木曜日午後7時から9時、東京・早稲田の早稲田奉仕園で開催された。第2回目のテーマは「声／幻聴」、先回の「眼」に引き続き、精神分析の四つの基本対象の一つ「声」の問題がテーマとなり、この回の講義内容は『ドール・フォーラム・ジャパン』誌の2001年12月発行の31号の連載「人◇形◇愛の精神分析」に掲載された。



『ドール・フォーラム・ジャパン』誌 第31号 2001年12月発行



第2回セミナー風景より

手前は美術家のマリオ・A氏。マイクを持っているのは
ストライプハウス美術館（現・ストライプハウス・ギャラリー）館長の塚原操氏

公開セミナー『人形の身体論—その精神分析的考察』

[サイトはこちら](#)

『人形愛の精神分析』紹介・青土社公式サイトより

[サイトはこちら](#)

ドール・フォーラム・ジャパン公式サイト

[サイトはこちら](#)

東京芸術劇場公式サイト

[サイトはこちら](#)

早稲田奉仕園公式サイト

[サイトはこちら](#)

押井守公式サイト ガブリエルの憂鬱

[サイトはこちら](#)

the special world of mario ambrosius 亜 真里男 MarioA

[サイトはこちら](#)

ストライプハウスギャラリー公式サイト

[サイトはこちら](#)



応答する藤田博史氏

この回の写真撮影は、編集者の篠原一平氏によるもの

つづく第3回から第5回までは「皮膚／体感」という同じテーマが続いたが、このうち連載「人◇形◇愛の精神分析」でまとめられたのは第5回セミナーの内容である。ではそれ以外の回では何が語られていたのか？

まず第3回セミナーは、2001年8月29日水曜日、早稲田から会場を移して、池袋の東京芸術劇場5階中会議室で、18時30分から21時30分まで、通常より1時間延長して特別企画が開催された。



池袋・東京芸術劇場外観

なお当劇場は現在改修工事中である

テーマはく人形の身体論—各論—「皮膚/体感」＋特別企画「『アヴァロン』の精神分析」
「特別企画 奇才押井守監督をゲストに迎え、最新作『アヴァロン Avalon』について、その独自の世界を徹底分析する試み」。



第3回は東京芸術劇場で開催された



会場は5階
これは会場を外から見たところ
ではなく
夜のガラス窓に映った会場光景



右が押井守氏 左が藤田博史氏
この回（第3回）の写真は
美術家でグラフィック・デザイナーの
高橋辰夫氏が担当

この日は、この年の1月に公開されていた押井監督の実写映画『アヴァロン』を参考上映したうえで、押井氏と藤田氏の対談が行われた。



「アヴァロン」公開時のポスター

この時の押井守氏の発言は、上述の『ドール・フォーラム・ジャパン』誌2001年12月発行31号に、「Just a Shell? 押井守 人形を語る」というタイトルで掲載された。またその後2004年に青土社『ユリイカ』の「押井守特集」に、この時の押井氏と藤田氏の発言（『ドール・フォーラム・ジャパン』誌掲載箇所とは別の箇所）が「公開セミナー『人◇形◇愛の精神分析』の記録から」というタイトルで一部掲載された。その時テーマとなった映画『アヴァロン』のオープニング部分の映像がこれである。



『ユリイカ』の「押井守特集」に掲載された押井発言は、押井氏がこのセミナーに参加した第1回、第2回、第3回、第18回の発言を抜粋したもので、いずれも貴重なものである。第3回の内容としては押井氏の興味深いゲーム論が収録されているが、ここでは第2回の「声」のテーマの折に語られた押井氏の夢と声をめぐる個人的な発言と藤田氏の応答を一部転載することにしよう。なお、この内容は単行本の『人形愛の精神分析』には掲載されていない。



まず押井氏は夢と声の話について、自分の夢には何故か音がないのだ、と語りはじめた。

「夢にはなぜ音がないのだろうかということはいつも思っています。僕は鉄砲が好きなので、夢の中でもよく鉄砲が出てくるのですが、何故か撃てない、撃ったとしても音がきこえない。何故なのだろう。そんなことはない、という人もいるのかもしれませんが、僕の場合は、夢の中には音が全然出てこないのです。これは何故なのだろうか。それは今日お聞きしたかったことの一つなのですから、いかがでしょうか？」

それに対する藤田氏の返答は次のようなものであった。

「夢に色がついているか、ついていないかという問題もひょっとしたら同じカテゴリーに入るのかもしれませんが、要するにそこで問題になっているのは、われわれが起きている状態で感じる五感から何かマイナスがあるという報告です。とくに声が聞こえていないとか、色がついていないとか、どうしてそういう報告が起こるのかということがおそらく問題になる。いや、そんなことはない。自分の夢は声が聞こえる、という人もいると思う。ですから一般論ではいえないけれど、夢にとって非常に面白いのは、何が欠けているということですね。それは声かもしれないし、色かもしれないし、あるいは自分が行き着く先きかもしれないし、なにか自分が求めている最終的なものかもしれないし、夢ってなにか常に不完全なのですね。つまり夢のなかでなにか探し続けているけれども、絶対にそれに行き会えないような不完全さがある。その場所はわかっているのだけれど行き着けない。夢の本質ってなにか欠けているのです。フロイトはそれを「夢の臍」といっています。自分の一部でありながら母親の身体に繋がっている部分。行き着きたいけれども行き着けない場所。」

次回の「タイムマシンにおねがい」は第4回目のテーマが何であったかということから語り始めることにしたい。

つづく

=====

精神分析医 藤田博史による
公開セミナーの予告と記録
SEMINAIRE OUVERT PERMANENT
mai 2012
『セミナー通信』Webマガジン版
2012年5月発行 「セミナー通信 復刊第5号 2012年5月号」
発行 ユーロクリニック文化部 EUROCLINIQUE Division Culturelle
編集 ユーロクリニック文化部 榎山裕子
Tel:042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

=====

Copyright 2011-2012 EURLCLINIQUE Division Culturelle. All Rights Reserved.